

中学校

平成 9 年 度

教育研究員研究報告書

国 語

東京都教育委員会

平成9年度

教育研究員名簿 (国語)

班	地区名	学校名	氏名
説明的文章班	世田谷	弦巻中学校	田邊克宣
	練馬	開進第三中学校	栗林昭彦
	足立	第四中学校	金田育代
	江戸川	葛西第二中学校	泉嘉穂
	八王子	甲ノ原中学校	嶋津弘興
	武蔵野	第三中学校	○ 宮川朝子
	調布	第五中学校	○ 蓑毛晶
	国分寺	第一中学校	渡邊仁敬
	檜原	檜原中学校	小川和宏
	文学的文章班	港	赤坂中学校
東川		東陽中学校	奈良美佐子
品川		荏原第一中学校	近藤昭久
渋谷		松濤中学校	美馬千秋子
杉並		高井戸中学校	谷川千敦子
板橋		第八中学校	藤沼隆
町田		加賀中学校	三石香織
町田		真光寺中学校	高橋宏明
無		金井中学校	◎ 加藤藤伸一
無		田無第二中学校	渡邊亮

◎ 世話人 ○ 副世話人

担当 教育庁指導部中学校教育指導課指導主事 田中洋一

目 次

I	研究主題設定の理由	2
II	研究の構想	
1	基本的な考え方	3
2	研究の方法	5
III	説明的文章班	
1	研究のねらい	6
2	指導の実際	7
3	まとめ	13
IV	文学的文章班	
1	研究のねらい	15
2	指導の実際	16
3	まとめ	23
V	研究のまとめと今後の課題	24

I 研究主題設定の理由

平成元年度に学習指導要領が改訂され、それに基づく新しい教育課程が実施されてから四年が経過した。この間、社会の変化に主体的に対応できる能力をもった、心豊かな人間の育成を目指し、さまざまな実践が行われてきた。

本研究に先立ち、中学校国語部会では、生徒の実態把握のために授業分析を行った。それによると現代の中学生には、「根拠に基づいた意見がなかなかもてない」「自分の考えをもたず、教師や他の生徒の考えに安易に追随する」「自発的に発表しようとする意欲に乏しい」など、思考力や表現力に不足するところがあることが分かった。これは、文部省が平成六年から八年にかけて行った、いわゆる「新学力テスト」の結果と、一致するところが多い。「新学力テスト」の結果で、現行の学習指導要領に基づく教育課程実施後の中学生の学力の傾向として指摘されたのは、知識や計算力には優れているが、思考力や表現力が不足しているということであった。特に国語科においては、「読み取った内容を自分で考え、言葉で伝える」という点に弱いという分析もされている。

中学校学習指導要領は、国語科の目標として「国語を正確に理解し適切に表現する能力を高める」「思考力や想像力」を養うと示し、思考力及び表現力の育成を重視している。しかし、前述した授業分析や文部省の調査の結果は、生徒たちにこれらの力を身につけさせるための指導について、まだまだ改善の余地があることを示すものであった。

以上のような状況と、本年度研究員の全体テーマ「生徒の学習意欲を高め、『生きる力』をはぐくむ指導法の工夫」を踏まえ、本部会では、「考える力」の育成を研究の中心に位置付けることにした。問題を発見し、把握し、解決していくために必要な「考える力」は、「社会の変化に主体的に対応できる能力」としての「生きる力」に、直接つながるものであらうと考えたからである。

また、その「考える力」を身につけさせるための手段として、本研究では生徒自身の表現活動を随所に取り入れることとした。前述のように、表現力の不足は生徒の現状でもある。本来、音声言語・文字言語のいずれにおいても、「表現すること」と「考えること」とは、深くかかわりあっている。また、あることがらに対して根拠を明らかにしながら自分の考えを述べる、という表現活動自体が、「考える力」の育成にたいへん効果があるであらうとも考えた。さらに、生徒自身が互いに発表し、聞き合うという主体的な授業参加の形態をとることが、生徒の学習意欲を喚起することにつながるであらうとも考えたのである。

本研究は、教材とする文章によって文学的文章班と説明的文章班とに分けて進めることとし、どちらの班の研究も、生徒一人一人が自分の考えを表現し、また人の考えを受け取ることで「考える力」を養ったり、向上させたりしていくことをねらいとし、指導法の改善・工夫を試みるものとした。

Ⅱ 研究の構想

1 基本的な考え方

本年度教育研究員中学校国語部会の研究主題は「表現活動を通して考える力を養うための指導法の工夫」である。この主題は、自己教育力の育成をいかに援助していくかという視点で定めたものである。

教育課程審議会の答申（昭和62年12月）では、教育課程の基本理念として「豊かな心を持ち、たくましく生きる人間の育成を図ること」「基礎的・基本的な内容を重視し、個性を生かす教育の充実を図ること」「国際理解を深め、我が国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視すること」とともに、「自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を図ること」が示されている。これは、変化の激しい社会を生き抜くためには、「自己教育力の育成」が重要であるという考え方に基づくものである。さらに中学校指導書国語編（平成元年 文部省）では、「これからの社会の変化に主体的に対応するためには、深い思考力、正しい判断力、適切な自己表現力などの育成が大切である。」と、「自己教育力」の基盤としての思考力、判断力、表現力の育成の必要性が示されている。

また、平成8年に中央教育審議会の第一次答申が出されて以来、生涯を通して社会の変化に主体的に対応し、たくましく生きる人間の育成を目指し、「生きる力」をはぐくむ教育の充実が強く求められている。特に平成9年度においては、少年刑事事件の低年齢化と凶悪化の傾向がみられ、社会を揺るがす事件が多発したことにより、青少年の「生きる力」の在り方が論議されたことは記憶に新しい。「生きる力」は、学校・家庭・社会が、それぞれの役割を分担した中で育成していくべきことであるが、学校、特に思春期の生徒を対象とし、義務教育の最終段階として生徒を社会に送り出す役割を担う中学校の果たさねばならない役割は大きい。

中学校の教育、とりわけ国語教育の中で育成すべき「生きる力」とは何であろうか。多様な要素が考えられようが、国語という教科の特性を考慮した場合、それは「考える力」という結論に達した。人生の中の様々な局面において、一人一人が冷静に情報を収集し、的確な判断を下していくこと、あるいは他の意見を受け止め自らの考えをより深めていくこと等ができるということが、生涯を豊かにたくましく生きる力そのものではないかと考えたのである。

そして、国語という言語を扱う教科で育てるべき「考える力」とは、「自らの考え・立場を言語を通して構成できる力」のことであると位置付けた。すなわち人間が自らの「考え」を構築する場合、その作業の基本は言語であり、また「考え」を推敲し再構築する際の基本も言語であるにとらえたのである。したがって状況を分析したり、必要な情報を収集・分析するための言語活動や、考えを深めていく過程での表現としての言語活動が「考える力」の基本に位置するものと考えた。このような経過を経て、本研究の中心に「考える力」の育成を位置付けたのである。

また、言語活動の中でも表現活動に着目し、「考える力」を養うための手だてとすることにした。表現は能動的な活動であり、生徒が主体的に取り組まねばならない。表現活動を重視することは、「自分の考えをもち、教師や他の生徒の考えに安易に追随する」という現在の中学生の傾向を改善するのに、適切な手段であると思われる。

「考える力」の育成について研究するにあたり、本分科会では「考える力」の要素として次の5つを想定した。

- (1) 情報を正しく受け取る力
- (2) 必要な情報を分類・選択する力
- (3) 根拠に基づいて自分の考えをもつ力
- (4) 自分の考えを人によりよく伝える力
- (5) 他の考えから学んだことを生かし、自分の考えを深め、総合的に判断する力

以上の5つの要素が有機的、系統的に機能することによって、「考える力」が向上するものと考えた。この5つの要素はすべて言語能力と密接につながるものであり、豊かな言語活動、とりわけ充実した表現活動を行うことにより高めることができると判断した。

また、本研究主題に迫るため次のような観点に留意して、研究を実践することとした。

第一の観点として、「考える力」は考えなければ育たないということを原則としてとらえた。すなわち、授業の中で生徒の「考える力」を育成するのなら、生徒が考える場面と時間を保障するということである。

ややもすると教師は効率という観点でのみ授業を計画しがちであるが、生徒が課題と対峙するための十分な場面と時間を確保する必要がある。この場こそが、生徒の主体的に思考する態度をはぐくみ、生徒が自己と向き合うことを可能にすると考えたのである。

今回の研究では、ワークシート等を使用した文章表現やパネルディスカッションの音声表現の場を豊富に設定した。またその際、教師は生徒に対する援助者としての役割を果たすように心がけた。

第二の観点は、生徒が考えるための道筋を明らかにしていくということである。教材を通じて生徒が自己と対峙できる環境を、教師が授業の中に設定していくことが必要である。説明的文章はもちろん文学的文章においても、文章の叙述に即し、読み解くためのアプローチの方法・方向・目標設定など、教師が援助者となって、生徒の思考の道筋を助けることが大切だと考えたのである。

したがって、生徒が考えを整理しやすいワークシートの工夫や、発表メモへのアドバイス等も欠かせないものであろうと考えた。授業の中では、ワークシートを前にして、どう考えたらよいか分からないまま漠然と時間を過ごしている生徒がいるが、このような生徒に、「～と比較したらどうか」「～から類推できないか」等の助言をすることによって、考える道筋ができる場合も多いと考えたのである。

以上の観点に基づき、本年度は説明的文章班と文学的文章班とに分かれ、それぞれの文章の特色を生かしながら、指導法の工夫を重ねた。生徒一人一人の表現活動を充実させながら、複数の表現活動を授業の中で連携・機能させることにより、「考える力」を育成していこうと試みたのである。

2 研究の方法

本研究では、説明的文章と文学的文章を教材とした。また、研究の組織としては、説明的文章班と文学的文章班との二つの研究グループを編成し、それぞれに指導法の工夫・改善を試みることにした。

○ 説明的文章班

主な教材として、一人の人間の生き方を中心に、環境問題についても述べた「ピーターラビットとナショナルトラスト」（諏訪雄一）を選定した。

自作教材（学習プリント、話し合い・発表用メモカード等）

○ 文学的文章班

登場人物の立場や状況・人間関係について読解を深め、共感できる作品として「子馬」（ミハイル・ショーロホフ）を選定した。

研究の方法としては、前述の基本的な考え方に立ち、生徒の実態調査の実施とその結果の分析、文献研究、授業研究、研究協議によって研究を進めることにした。その際、特に次の点に留意した。

(1) 生徒の実態調査

国語の学習指導上の課題として、生徒が自らの考えをもち、自発的に発表しようという態度が十分に育っていないことが指摘されている。本研究では、ワークシートへの個々の取り組みの状態、グループ討議やパネルディスカッションでの生徒の状況を観察し、学習活動の状況の把握に努めた。また「考える力」についての意識を把握するために実態調査を行い、その分析結果を指導目標や指導方法に反映させた。学習後にも同様に実態調査を行い、生徒の学習状況・達成度等の実態を分析し、考察した。

(2) 文献の研究

文献については、研究主題にかかわる出版物、先行研究事例など、できる限り広範囲にわたって資料を収集し、研究を深めた。特に「考える力」を育成する指導に関するものは、詳細に分析・検討した。

(3) 指導法の工夫

次の点に留意した授業実践を行い、学習後の実態調査によって生徒の変容を把握した。

- ① 生徒一人一人が、「考える力」を深めていくことのできる場を授業の中に意図的に取り入れる。
- ② 授業の中で、表現と理解が相互に機能し合うよう、グループ討議やパネルディスカッション等を行う。
- ③ 学習の目標を達成するために、学習の手順を明らかにし、援助の方法を工夫し、補助教材・教具・学習プリント等の効果的な活用を図る。
- ④ 「考える力」を高めるために、多様な「考える機会」を日常の授業の中で計画的に生徒に与える。

Ⅲ 説明的文章班

1 研究のねらい

説明的文章の指導は、要旨をとらえたり、文章の構成を理解したり、言葉の意味を理解したりと多岐にわたっている。そして学習の中心は読解であることが多かった。しかし、これからの社会の変化に主体的に対応していくためには、論理的思考力や正しい判断力、適切な自己表現力などの育成が不可欠である。「表現すること」は「考えること」につながる。「表現する」ためには情報を取捨選択し、根拠に基づいた意見をもたなければならない。さらに、他者に対して分かりやすく伝える方法を工夫することにより考えを一層深めることもできる。このように表現活動を通すことにより、考える力を養う学習が効果的にできると考えた。

説明的文章班では、論理的に構成されている文章を教材とし、考える力を養うための指導法の工夫について研究した。

研究に先立ち、生徒の実態調査を行い、その結果を分析し考察した。自分の意見や考えをもっても授業ではなかなか発表できないと答える生徒が多かった。その理由として、以下のようない点が挙げられている。

- ・「自信がない。」
- ・「人前で意見を言うのは恥ずかしい。」
- ・「自分の考えていることを、上手にまとめられない。」

また、自分の考えを深め、根拠に基づいた意見をもつためには以下のようなことが必要であると考える生徒が多い。

- ・「文章をよく読むこと。」
- ・「筆者や自分、周囲の人など、いろいろな視点から考えること。」
- ・「自分の考えを自分の言葉で表現すること。」
- ・「話合いの中でお互いに意見を発表し合うこと。」
- ・「他の人の意見を聞いて、自分に足りないものを取り入れていくこと。」

このように、生徒自身は自らの力を冷静に分析しており、学習への意欲も感じられる。また教師からは、「生徒が自分の意見をもてない」「考えを深める力が不十分である」という指摘が多くあり、日常の授業の工夫と計画的な指導の必要性が明らかになった。そこで、自分で考えたことを意見として書いたり話したりする表現活動を通して考えを深め、根拠のはっきりとした意見を発表させるための指導を中心に、次の方法で研究を進めた。

- (1) 多様な考えをもつことができる教材を選ぶことで、自分の課題を見つけさせる。
- (2) 小集団による話合いの中で、自分の考えを発表する機会を多く設定することによって、積極的に考えさせる。
- (3) 他者の意見・考えを検討し、自らの意見を深めるための過程を繰り返すことによって、考える力を養う。
- (4) 自分の考えを表現する方法として意見文を書かせる。
- (5) 「考える力」を高めるためのトレーニング用ワークシートを作成し、計画的にトレーニングを行う。

2 指導の実際

(1) 【研究テーマとの関連】 本研究においては、「表現活動」を以下の二つとしてとらえた。

① 文章表現活動〔ワークシートの記入・意見文の作成〕

- ・ 事前に、筆者のものとのとらえ方や考え方に対して、自分の意見や考えをもつ練習をするために、新聞投書などを用いたトレーニング用ワークシートに記入する。(プリント 1)
- ・ 課題解決のためのグループ討議及び最終的な意見文作成を念頭に置いて、ワークシートに記入する。(プリント 2・3)
- ・ グループ討議および発表から得た意見や考え、感想を意見文として書く。(プリント 5)

② 音声表現活動〔グループ討議・発表〕

- ・ 課題解決のためにグループで討議をする。
- ・ 討議結果の発表をする。

以上の表現活動を通した「考える力を養う学習」として、以下の指導案を設定した。

(2) 【教材】 『ピーターラビットとナショナルトラスト』

(3) 【教材観】 環境保護への意識と具体的取り組みの要素を含む説明的文章である。本教材の特色は、環境問題に限らず、一人の人間の生き方についても書かれており、生徒一人一人が多様な視点から考えを深めることができるところにある。多様な視点をもって文章を読む力は、生涯にわたっての読書能力としても欠かせないものである。すなわち、本教材における学習は、説明的文章に限らず、他の形式の文章を学習する場合にも応用ができるものである。

(4) 【指導目標】

- ① 自分の興味・関心に応じた情報を、文章から読み取る力を養う。
- ② 文章から読み取った情報を基に、根拠を明らかにした上で、自分の意見や考えをもつ力を養う。
- ③ 話し合い及び発表を通して、自分の意見や考えを深める力を養う。
- ④ 意見文を書くことを通して、自分の意見や考えを深める力を養う。

(5) 【指導計画】 — 7時間扱い

<事前指導> 新聞投書などを用い、筆者のものとのとらえ方や考え方に対して、自分の意見や考えをもつ練習をさせておく。(プリント 1)

指導計画の中の(1)～(5)は、下記に示す「考える力」の要素のことであり、該当する「次」の学習活動によって主に身につけられる力を記号で表している。

- (1) 情報を正しく受け取る力
- (2) 必要な情報を分類・選択する力
- (3) 根拠に基づいて自分の考えをもつ力
- (4) 自分の考えを人によりよく伝える力
- (5) 他の考えから学んだことを生かし、自分の考えを深め、総合的に判断する力

1 次	<p><第1時> (1) (2) (3)</p> <p>① 学習計画(1～5次)の確認をする。 ② 全文通読をする。 ③ 気付いたこと・疑問・興味・関心・取り組みたいことを本文でチェックし、課題発見メモ(プリント2)に記入する。 ④ 課題設定(個人)をする。</p>
2 次	<p><第2・3時> (1) (2) (3) (4) (5)</p> <p>① 課題発見メモを基に課題別グループを作る。 ② グループごとに課題設定のための話し合いをする。 ③ 課題について、教科書を主とした資料の読み取りから、グループとしての意見・考えをまとめる。 ④ グループ発表の内容・方法等の話し合いをする。</p>
3 次	<p><第4・5時> (1) (3) (4) (5)</p> <p>① グループごとにまとめた意見・考えを発表する。 ② 他のグループの発表を聞き、発表内容の要約および自分の意見や考え、感想を書く。</p>
4 次	<p><第6時> (3) (4) (5)</p> <p>① 前時までの学習を踏まえ、意見文(350字程度)(プリント5)を書く。</p>
5 次	<p><第7時> (4) (5)</p> <p>① 教師が事前に選んだ意見文(課題ごとに学年から3点程度。各自配布。)を各自で読む。② ①に対する感想文(200字程度)を書く。</p>

(6) 【評価の観点と方法】

<観点>・自分の興味・関心に応じた情報を、文章からの的確に読みとったか。

- ・根拠を明らかにした自分の意見や考えをもったか。
- ・話し合いおよび発表を通して、自分の意見や考えを深めることができたか。
- ・意見文を書くことを通して、自分の意見や考えを深めることができたか。

<方法>・机間指導 ・ワークシートの評価 ・自己評価カードの評価 ・作文の評価

(7) 【毎次の学習目標および指導展開】

《目標》<1次> ① 本教材の学習目標および学習の流れを理解する。

② 個人ごとに課題を立てる。

<2次> ① 課題ごとのグループを作る。

② 話し合いにより、グループの課題を決定する。

③ 話し合いにより、グループとしての意見や考えを決定する。

<3次> ① グループの意見や考えを分かりやすく発表する。

② 他のグループの意見や考えを聞き、自分の意見や考えを深める。

<4次> ① 前次までの学習を踏まえ、意見文を書く。

<5次> ① 他の意見文を読み、自分の意見や考えを深める。

展	課題設定(グループ)	<p>グループごとに課題設定のための話し合いをする。</p> <p>① 司会・記録係を決める。 (以下、「課題まとめプリント」*3(プリント3)に記入しながら話し合いを進める。)</p> <p>② 以下の(ア)(イ)を通してグループとしての課題設定をする。</p> <p>(ア) 本文から必要な情報(事実・筆者の考え・ものものとりえ方等)を読み取る。</p> <p>(イ) 本文以外の資料*4から必要な情報を読み取る。</p>	<p>話し合いの進め方について全体指導とグループへの援助を行う。</p> <p>*3 記録係以外の生徒はメモ程度の記入をするよう指示をする。</p> <p>個人で設定した課題を包括した内容の課題設定をさせる。 (読んだり調べたりしてすぐに解決できる課題を設定しないように助言する。)</p> <p>*4 事前に課題に関するものを教師が用意。クラスに常備し、国語係が管理するよう指示をする。</p>
	課題解決	<p>グループごとに課題解決のための話し合いをする。</p> <p>① 以下の(ア)(イ)を通して課題解決をする。</p> <p>(ア) 本文及び資料から必要な情報(事実・筆者の考え・ものものとりえ方等)を読み取る。</p> <p>(イ) 本文および資料から得た情報を基に、[感想・疑問・意見・推測・考えたこと・わかったこと・気が付いたこと]などを出し合う。</p> <p>② 発言メモや発表用資料*5を作成する。</p>	<p>記録係は次の点を「課題まとめプリント」に明記するよう指示をする。</p> <p>(本文からの情報にはページ数及び行数。本文以外の資料からの情報には出典、ページ数及び行数。)</p> <p>グループごとに机間指導をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・読み方や資料選びの助言を行う。 ・活動が滞っているグループへの援助を行う。 <p>*5 図表等。適宜助言を行う。</p>
開	自己評価	自己評価表(プリント4)に記入する。	本時の取り組みを振り返らせ、次時に生かすように指示をする。
	次時の学習の予告	次時の学習の確認をする。	

考えるトレーニング 第一回

「書いてあることを的確につかむ その一」 文末表現に気をつけよう

年 組 番(氏名)

この『考えるトレーニング』は、みなさんに
 一 文章を読んだり、話を聞いたりしたとき、書き手や話し手のいいことを的確に読みと
 り
 二 それに対してみなさん自身が、自分の意見を、しっかりとした根拠をもとにもてるように
 する
 ということを目的として行うものです。一回一回の課題は、どれも簡単なものですが、繰り返し
 繰り返し取り組むことで、力を養っていききたいと思います。みなさんも、毎回の課題に真剣に取
 り組んで下さい。

第一回目は、右にあげた目的の二に関する事です。
 ある文章を読んだとき、書き手の最もいいことはどんなことか、ということをつかむための、
 大きな手がかりになるものに、『文末表現』というものがあります。
 文章は、いくつもの文の集まりです。その一つ一つの文の、終わりの言葉に注目するのです。
 ある文章の中のある文が、

↓するべきだ。

↓しなければならぬ。

↓が重要である。

↓だと考える(思う)。

などで終わっていたら、要注意です。なぜなら、このような表現で終わる文は、その文章の中で重要
 な役割を担っている場合が多いからです。

【課題一】各文の文末表現に注意しながら、次の文章を読み、筆者の考えや意見に当たる部分一カ所
 に傍線をつけなさい。

私は、学校の授業の時間数を、もつと少なく
 するべきだと思います。勉強がでさなくなつて
 しまつとか、暇になつたしまつとか、そういう
 反論もあるかもしれませんが、でも私は、今の中
 学生は忙しすぎると思うのです。朝は部活の朝
 練から始まり、その後たつぷり六時間の授業が
 あります。放課後は委員会や部活があるし、私
 は行っていないけれど、帰ってから塾に通つて
 いる友達もけっこういます。部活や委員会も大
 変だけれど、どれも自分のためになっている、

という実感がありません。しかし授業の方は、正
 直に言うと、『何でこんなことを勉強しなけれ
 ばならないんだろう?』と感じるものもありま
 す。どの教科の先生も、自分の教科の大切さを
 熱心に説明して下さいます。でも、その場では
 わかったような気はしても、何か納得しきれな
 いものが残ります。本当にすべてが必要なこと
 なのでしょう。勉強する内容をもう少し減ら
 して、その分余裕を持ちたい。私は今、そう思
 っています。



課題発見メモ

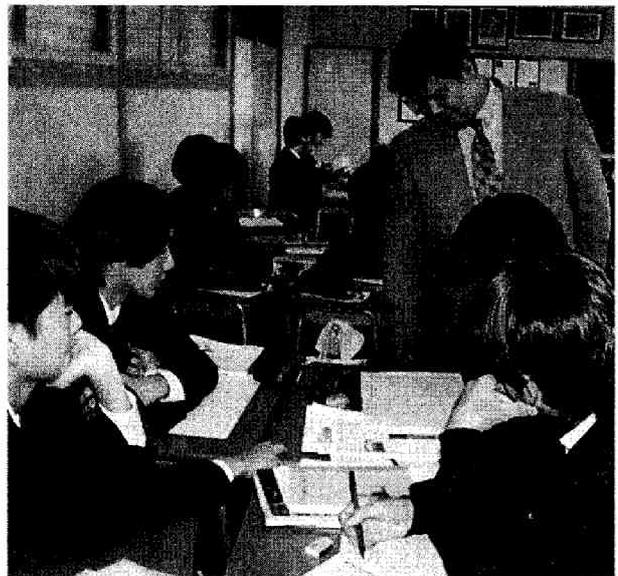
二年()組()番
氏名()

『ピーターラビットとナショナルトラスト』を読んで、
 疑問をもつたこと、興味・関心をもつたことについて、
 左の記入して下さい。共通の課題が持てそうな人三、四
 人のグループを作って話し合ったり調べたりして学習を
 進め、最終的にグループでの意見をレポートにまとめ、
 前へに出して発表をします。

「最も疑問に思つたこと。または、最も興味・関心
 をもつたこと。」

「なぜ疑問に思つたのか。または、なぜ興味・関心
 をもつたのか。」

＜自己評価表＞		2年()組()グループ	氏名()
1. グループ員として協力して学習に取り組んだか。	(A B C)
2. 自分の意見や考えを述べる事ができたか。	(A B C)
3. 文章から必要な情報を得ることができたか。	(A B C)
*時間の余裕があったら、今日の授業の感想を書いて下さい。			

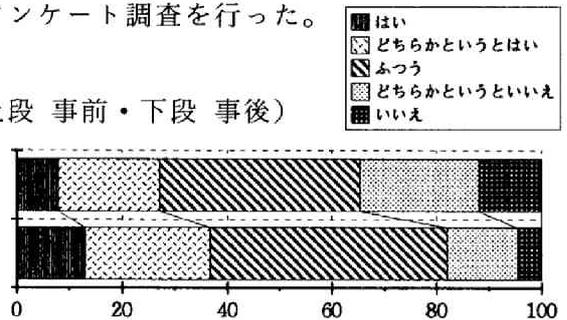


3 まとめ

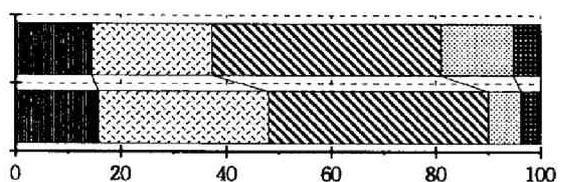
説明的文章班では、検証授業の事前と事後に「説明的文章の読み取り」「意見発表の聞き取り」のそれぞれの場面において、主に「相手の意見とその根拠」「自分の意見とその根拠」に対して、生徒にどのような意識の変容が見られるかアンケート調査を行った。

(1) 生徒の意識の変容 (アンケート集計結果抜粋、上段 事前・下段 事後)

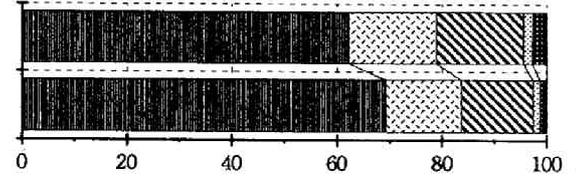
① 説明的文章を読んだときに、筆者のものの見方や考え方を理解しようとしていますか。



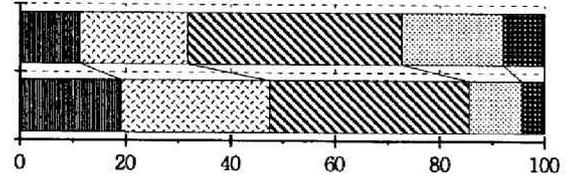
② 他の人の意見や考えを聞いたときに、その人の見方や考え方を理解しようとしていますか。



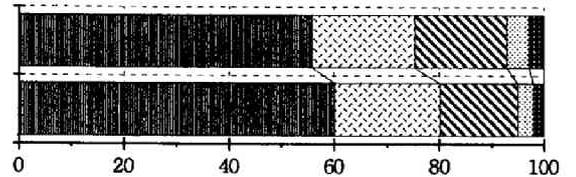
- ③ 自分自身の意見をもつことは大事だと思いますか。



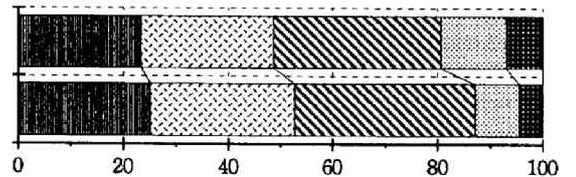
- ④ 説明的文章を読んだときに、そこで述べられていることに対して自分の意見をもとうとしていますか。



- ⑤ 自分の意見を人に伝えることは大事だと思いますか。



- ⑥ 他の人の意見から、自分の考えを改めたり深めたりしようとしていますか。



(2) 考 察

- ① 多様な考えをもつことができる教材を使用したことで、生徒一人一人が興味をもって話合いに取り組み、意欲的な活動がみられた。
- ② 「根拠に基づいた自分の意見をもつ」「最終的に意見文を書く」のように、学習活動を明確に示したことにより、生徒が目標をはっきりさせて学習することができた。それにより、多くの生徒が「自分の意見をもつことの重要性」と「意見を人に伝えることの重要性」に気付くことができた。
- ③ 小集団による話合い活動を通じて、他の考え方に触れることにより、自分の考えを深める生徒が多かった。
- ④ 事前のトレーニング用ワークシートの使用により、生徒が意見文の形式やその読み取りに慣れることができ、意見文を書く際の参考にもなった。

(3) 今後の課題

- ① 小集団による話合い活動の結果を、学級全体にフィードバックしていく方法と時間の確保について、さらなる工夫が必要である。
- ② 意見発表という学習形式において、主体的な目的意識がもちにくい生徒に対して、どのような指導や助言をしていくかについては、一層の工夫が必要である。
- ③ 生徒が主体となって行う活動を、生徒の発達段階に配慮して、意図的・計画的に3年間の指導計画に位置付けていく必要がある。

IV 文学的文章班

1 研究のねらい

文学的文章班では、思考することの楽しさが味わえるような教材を選択し、「考える力」を養う指導法を工夫した。生徒が他の考えから学んだことを生かし、自分の考えを深め、その内容を総合的に判断する態度をもつために、討論の一形式であるパネルディスカッションを設定した。パネルディスカッションを取り入れることにより、「考える力」として注目した要素をおさえながら、体験的な学習や問題解決的な学習の充実を図ることができると考えた。

この研究にとりかかった当初の主題設定のための授業分析から、最近の傾向として、

- ・「自分の意見をもてない生徒が増えている。」
- ・「聞く力が弱く、他の意見をうまく取り入れることができない。」
- ・「答えをすぐに求め、じっくり考えをまとめるのが苦手である。」

などの問題点が挙げられた。特に一斉授業の中では、自分でできなかったとらえ方を知り、とらえ方の違いを許容し、新たな視点をもつことはなかなか難しいのが現状である。

これらの解決のために、以下のねらいを設定した。

- (1) 思考することの楽しさが味わえる、読みごたえのある教材を選択する。
- (2) ワークシートを工夫し、自分の力で学び、読みとれる手だてを示唆する。また、常に自分の考えの根拠となった教材文の叙述に戻らせ、文章表現や音声表現の論理的な裏付けを確認させる。
- (3) 個人の読み取りを行った上で小集団の話合いを適宜行い、自分の意見との違いを見付け、検討していく習慣を付けさせる。
- (4) 討論の一形式であるパネルディスカッションを取り入れ、自分の考えを深めていく「場」を設定する。特別な「場」を設定することで他の考え方を認め、自分の変容を意識させる。パネルディスカッションを選択した主な理由は以下の通りである。
 - ① これからの時代に必要な情報収集能力、論理的思考力、討論する力などを育成する方法として有効である。
 - ② パネルディスカッションでは三つ以上の立場が設定でき、自分の立場を明らかにして臨む必要がある。また、反論するだけでなく、他の考えを吸収し、協調したり認め合ったりすることが可能である。
 - ③ フロアメンバーとの質疑応答も行われるため、一度に多くの生徒が参加できる。
 - ④ パネルディスカッションにロールプレイングの要素を加えることにより、登場人物の心の葛藤をより具体的に表現させることができる。

価値観が多様化している現代社会においては、優れた文学作品が生徒に与える感動を大切にしながら、生徒一人ひとりの「考える力」を養っていくことが、国語科の大きな課題である。本研究では、初発の感想から読みを深めていく過程で、論理的な思考に基づいた適切な表現ができるようになること、さまざまな表現活動を通して自分の考えをより確かなものとして獲得させることがねらいである。これらの「考える力」につながる指導法を工夫していくことが、これからの社会の変化に主体的に対応できる能力を高める学習として効果的であると考えた。

2 指導の実際

(1) 【研究テーマとの関連】

本研究においては、「表現活動」の中から文字言語による文章表現活動と、音声言語による話し合い活動を選び授業に取り入れることとした。

特に、パネルディスカッションを取り入れることにより、その準備段階でのワークシートを利用した文章表現活動、それを基にしたグループ討議・全体討議における音声言語活動を行い、考える力（生きる力）の育成につなげようと考えた。

① 文章表現活動（ワークシートを中心として）

問題解決学習の形を取りながら内容を把握していくためのワークシートを準備し、ステップを踏んでいけば理解が深まり、パネルディスカッションが充実するように工夫した。

生徒はワークシートの完成のためにかなり時間を費やすことになるので、授業時の机間指導や回収時の指導等で個々の生徒の進み具合をつかんでおくことが大切になった。

② 音声言語活動（パネルディスカッションを中心として）

パネルディスカッションを第一学年から計画的にやることによって、生徒がこの方法に慣れた状態で、この作品に取り組むことが望まれる。例えば、一年生は「少年の日の思い出」、二年生は「走れメロス」・「平家物語・扇的」等が適していると考えられる。

(2) 【教材】 『子馬』

- (3) 【教材観】 『子馬』は中学二年生用の教科書にかつて収録されていた、ノーベル文学賞を受賞した作者の文学教材である。この作品は、ロシア革命後の内線のさなかに、赤軍の兵士であるトロフィムの乗馬から生まれた子馬をめぐる生と死を描いた小説である。今回設定した指導目標を考える時、最高学年を控えた中学二年生が、登場人物の心情を読み取りその人間像に迫っていく際、読みごたえがあり、加えて文学作品としても叙述にすぐれたものであることが望ましいと考えた。さらに本作品は、戦時下という状況設定におかれた人間の心理・思考・判断——それぞれの生き方がもつ真実を、自分と他者、そして社会とのかかわりを意識し始める二年生にとっては多様で深い読み取りのできる作品と考え、選定した。

(4) 【指導目標】

- ① ものの見方や考え方を広くし、自分の立場を明らかにして適切に表現する能力を高めさせる。
- ② 登場人物の心情について、生徒相互の発言を通じて自分自身の初発の感想からの深まりを確認させる。

(5) 【指導計画】 — 8時間扱い

※表中の(1)～(5)は、「考える力」(本研究に際して注目したもの)のうち、該当時間の指導目標に関係する力である。

- (1) 情報を正しく受け取る力 (2) 必要な情報を分類・選択する力
 (3) 根拠に基づいて自分の考えをもつ力 (4) 自分の考えを人によりよく伝える力
 (5) 他の考えから学んだことを生かし、自分の考えを深め、総合的に判断する力

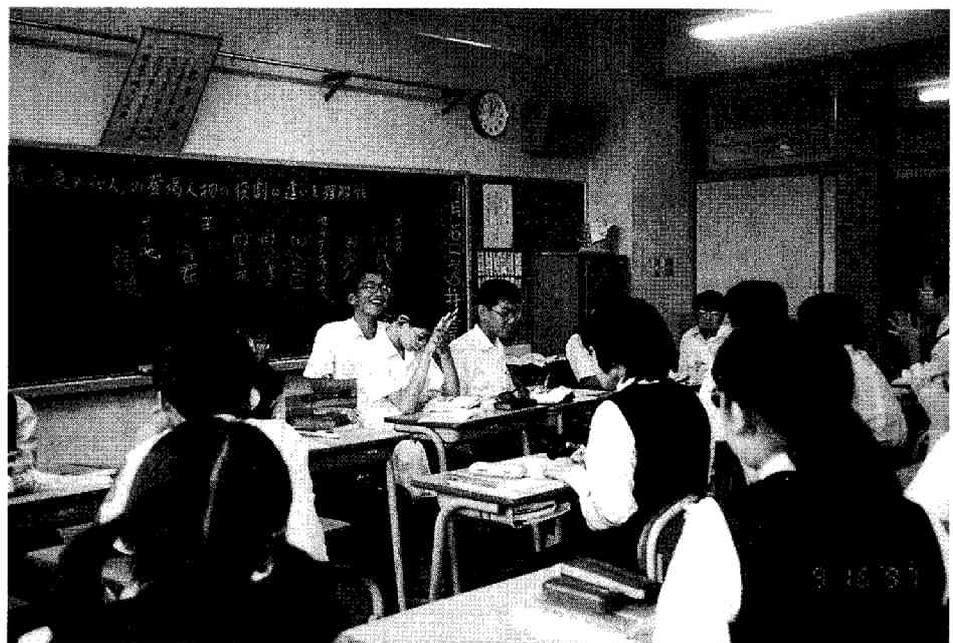
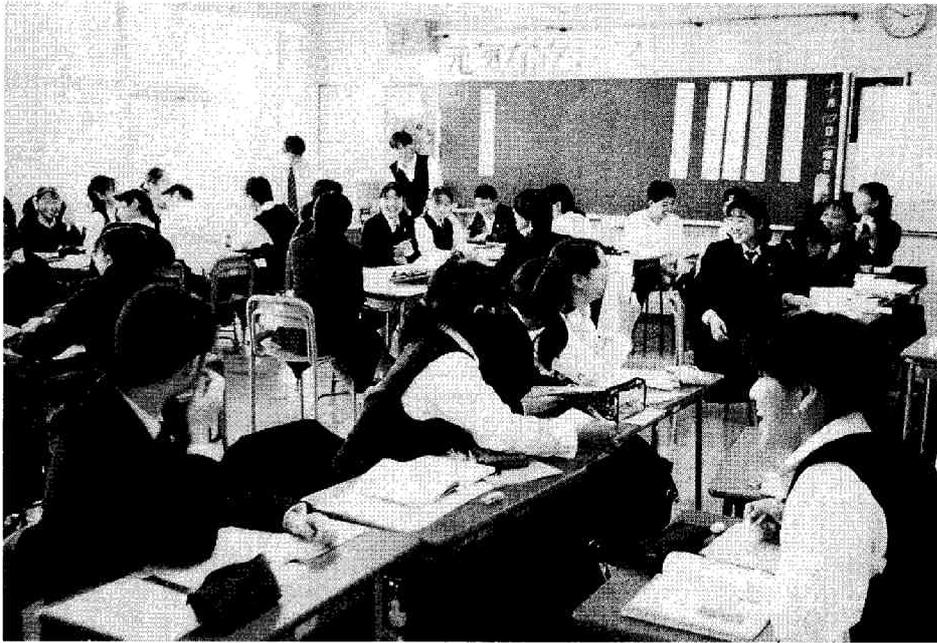
(6) 【本時の展開(第7時)】

	学 習 内 容	学 習 活 動		評 価 の 観 点
導 入	・学習のねらいを確認する。	・事前にそれぞれの立場(パネリスト・フロアメンバー)に分かれて着席しておく ・パネルディスカッションの流れを確認する。		
展 開	・パネルディスカッションを行う。 ①司会によるテーマの説明とパネリスト紹介 ②パネリストによる1回目の発表 ③パネリスト相互の質疑応答 ④フロアメンバーも交えての全体討議 (各立場ごとの話し合い『作戦タイム』を必要に応じて設ける。) ⑤パネリストによるまとめの発言	<パネリスト> トロフィム・中隊長・将校などに分かれる。 主張の根拠を明らかにして発表する。 他の立場に対する質問・批判を中心に発言する。 自分の立場を明確にして話し合いに臨む。 パネリストが話し合いを経ての自分の考えをまとめる。	<フロアメンバー> それぞれの立場からの発表を明確に聞き取る。(必要に応じてメモする) 聞き取りの整理 質疑応答の対策を練る。 聞き取りのまとめをする。	(パ) 発言の仕方を工夫しているか。根拠に基づいた意見を述べているか。 (フ) それぞれの立場の違いが理解できたか。発言の根拠が叙述に基づいているか。 他の意見から学んだことを生かし、自分の考えを深めることができたか。
ま と め	⑥司会者によるまとめ ・話し合いの成果を評価する	・教師の評価を聞く ・次時の予告を聞く		

※表中の(パ)・(フ)は、それぞれパネリスト・フロアメンバーを表す。

(7) 【工夫、修正、改善点】

- ① 初発の感想と並行して、人物の関係図を書かせることによって、興味をもって取り組めた生徒が多くいた。
- ② ワークシート②で、心情曲線を記入させるように工夫することによって、作品に表現されている生命観や生と死の関係をうまくとらえることができた。
- ③ パネルディスカッションを行うとき、例えば、トロフィムの立場だったら「最後のトロフィムの微笑み」の意味は何か等、重要と思われる論点は黒板に掲示したので、話合いの焦点がずれなかった。



3 まとめ

文学的文章班では、6回の研究授業を行いながら、本研究のねらいに迫るべく改善を加えてきた。パネルディスカッションという討議形式を取り入れ、その準備段階でのワークシートを利用した文章表現活動、それを基にした小集団での話し合いと、全体討議という音声言語活動を行い、「考える力」の育成を試みた研究である。学習活動の過程に従い、その成果をまとめている。

(1) 考察

① ワークシート

パネルディスカッションに向けて、個の立場・考えを確立していくための重要な部分である。根気のある個人作業であるが、作品と向かい合う時間であり、自分自身の読み取りを確認し、新たな発見をし、疑問をまとめていくステップである。人物関係図・心情曲線などでより発展的に興味をもって書き込みをする姿がみられた。結果として、自分対作品という関係をじっくりとつくり出すことができ、より主体的に取り組む姿勢が見られた。

② 小集団の話し合い

自分の立場を明らかにする段階での小集団の話し合いは、自分と同様の意見や異なる根拠・見方を知ることによって考えを広げ、パネルディスカッションへ向けての自信をもつことができた。

③ パネルディスカッション

＜パネルディスカッションの特徴を生かして＞

- ・ パネリストに限らず、フロアメンバーも含め、全員が討論に参加でき得る形式である。したがって一人ひとりの参加者が、自分自身の立場と考えをしっかりと持つということが大前提である。その意味で主体的に準備に取り組む意欲に結び付けることができた。
- ・ 討論の過程の中で、自分自身の立場や考えを変えることが認められているので、小集団の中での意見に固執する必要がなく、個の意見をのびのびと主張することができた。それとともに、個の変容も大切な要素としてお互いに認め合うことができ、一層の作品理解、友人の理解につながった。

このように個々の丹念な読み取りが、小集団から全体の討議へと進む中で、思考したり表現したりすることの楽しさを味わいつつ、「考える力」を養うことができたと考えられる。

(2) 今後の課題

- ① ワークシートの学習において、機械的な作業に陥らないようにしなければならない。そのためには、初読における生徒の問題意識を持続させ、発展させるワークシートの更なる工夫が必要である。
- ② パネルディスカッションの扱いは一時限であり、単発的な質疑応答に終わらぬようにしなければならない。そのためには、パネルディスカッションの準備段階から、論点を絞っておくという方法も考えられる。
- ③ パネルディスカッションを全体の指導計画の中のどの段階で行うのか。読み取りのためのパネルディスカッションか、読みを発展させるためのパネルディスカッションか等、その目的をしっかりと踏まえておくことが大切である。

V 研究のまとめと今後の課題

今年度は研究主題を「表現活動を通して考える力を養うための指導法の工夫」と設定し、音声表現、文章表現という表現活動を通して「考える力」をつけるにはどうしたらよいかについて研究した。「考える力」を養うための要素をあげ、「生徒一人一人が、自分の考えを表現し、人の考えを受け取るという活動を繰り返し行っていくことで『考える力』が養われていくのではないか」と考えたのである。

説明的文章班で行った生徒の実態調査では、自分の意見や考えをもっていてもなかなか人前で発表できない生徒が多いことが明らかになった。そこで、日常の授業の工夫と計画的な指導をねらいとして、小集団による話し合い活動、話し合った内容の発表、それをもとに意見文を書くという授業形態を試みた。あわせて、新聞の投書などを用い、書き手のものとのとらえ方や考え方に対して、自分の意見や考え方をもつ練習もさせた。

これらの指導を行った結果、話したり書いたりするときに、人の意見を聞いて自分の意見に生かしたり、根拠に基づいて意見を述べることを意識して行う生徒が多くなった。また、説明的文章の内容を読み取っていく上で、課題発見学習の方法を学ばせることができたのも成果の一つである。

文学的文章班では、ワークシートを使用した個人の読み取り、さらにその読み取りを踏まえた小集団による話し合いを重ね、パネルディスカッションへとつなげる指導を試してみた。特にパネルディスカッションでは、ロールプレイングの要素を加えることで、作品の主題にかかわる登場人物の心情を具体的に表現させようとした。

指導の結果、自分の意見を根拠に基づいて相手にわかりやすく伝えることの大切さに気付いた生徒が増え、意欲をもって主体的に学習に取り組む姿が見られるようになった。また、他人の意見を聞くことによって自分とは異なる考えにふれる場面を与えられ、より自分の意見についての考えを深める意識付けにもなったようで、パネルディスカッションでは、活発な意見交換が行われていた。

これらの研究の結果、生徒たちは、「主体的に考える」ことを通して、思考の深まる過程を体験できた。ワークシートの完成、話し合い活動における意見交換等を通して、自らの考えの深まりを意識できたことは大きな成果であった。

生徒のこのような主体的な思考活動を定着させるには、計画的、系統的、段階的な指導が不可欠になってくる。指導計画の立案や教師の援助の仕方も含め、生徒の発達段階やおかれた環境などを考慮した学習形態を工夫していくことが今後の課題といえるであろう。